

## 中国の最近の動向②

### ～今のリアルな中国を感じてほしい～

ふく い たか のり  
福井 貴規\*

### 1. 中国における建設分野の状況

先月号で、今の中国の経済やイノベーションが生まれやすい社会の状況など、その雰囲気を感じていただいた。今回は、建設分野に視点を移し、中国国内のインフラ整備の状況、それを支える中国の建設会社について紹介する。建設分野においても、その規模感、スピード感に中国のすごさを感じていただけるのではないかと思う。

#### 1) 中国国内のインフラ整備

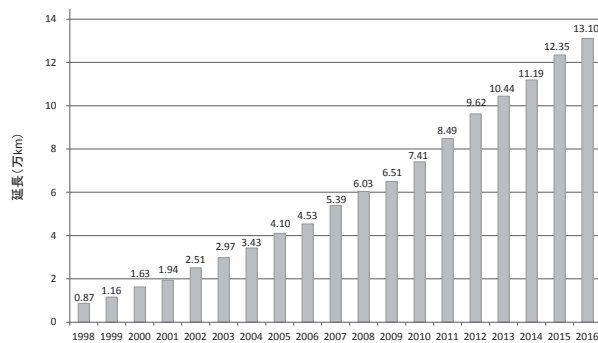
日本の高速道路の総延長は約9,300kmであるが、中国では毎年9,000km程度のペースで延伸しており、2016年末で130,000kmを超えている。同様に日本の高速鉄道(新幹線)の総延長は約2,700kmであるが、中国では毎年約3,000km程度のペースで延伸しており、2016年度末で約22,000kmに達している。中国で最初の高速道路が供用を開始したのは1988年、最初の高速鉄道が運営を開始したのは2008年なので、非常に短い期間、特にここ10年から20年の間に、膨大なインフラ整備が進められてきたことが分かる。

また、日本の共同溝の総延長は国と地方あわせて約600km程度であるが、中国では試行的なものを除いて整備実績がなかったにも関わらず、2015年に共同溝建設推進の政府方針が示されると、2016年には各都市において合計2,000km以上の共同溝建設に着手している。国としてやると決めた時のスピードの速さと規模の大きさには驚かされる。

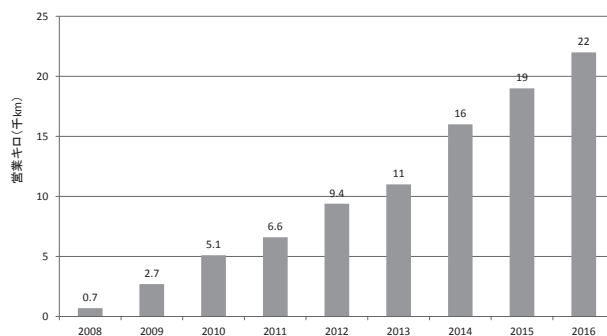
#### 2) 中国の建設会社

中国の主要な建設会社は、中央政府、地方政府の建設部門の一部が切り離される形で設立された。特に中央政府を母体とする建設会社は規模が大きく、世界の建設会社の売上高ランキングにおいて、上位

を独占している(1位:中国建築(約1兆5百億元)、2位:中国中铁(約6千3百億元)、3位:中国鉄建(約6千3百億元)、4位:中国交通建設(約4千3百億元))。例えば中国建築の売上高を円換算すると約17兆円なるが、これは日本のスーパーゼネコンの10倍に相当する規模となる。中国の建設会社の売上高がここまで大きいのは、もちろん国内のインフラ市場が巨大であることが大きな要因であるが、道路、橋梁、港湾の土木工事を主要事業とする中国交通建設は、収益の2割を海外事業が占めており、海外事業に限定した売上高ランキングにおいても、ACS(スペイン)、Hochtief(ドイツ)に次いで、世界第3位となっている。



図一 中国の高速道路整備延長



図二 中国の高速鉄道営業距離

\*国土交通省 総合政策局 行政情報化推進課 企画専門官(前職: 在日中国日本国大使館一等書記官)

03-5253-8111 (代)

### 3) 中国の建設会社の技術力

第三国におけるODA等のプロジェクトにおいて、「中国の建設会社はちょっと前まではひどかったけど、最近は大いぶ良くなってきている」という声を良く聞く。おそらくそれは事実だと思う。しかし、そもそも第三国でのプロジェクトは、当該国のニーズにあわせて必要な水準のものを合理的なやり方で整備しているものであり、また、派遣されているプレイヤーも国内の本当の精鋭部隊とは限らないため、そこだけを見ていると、中国の建設会社の本当の実力を見誤るかもしれない。

広大な中国大陸の様々な現場条件において、膨大なインフラ整備の経験を積み重ねてきている巨大な企業、それが今の中国の建設会社である。技術力がないわけがない。中国で建設分野に携わる多くの中国人、日本人の共通の見解として、既に土木分野においては、日本の建設会社にできて、中国の建設会社にできない工事はないと言って良いだろう。

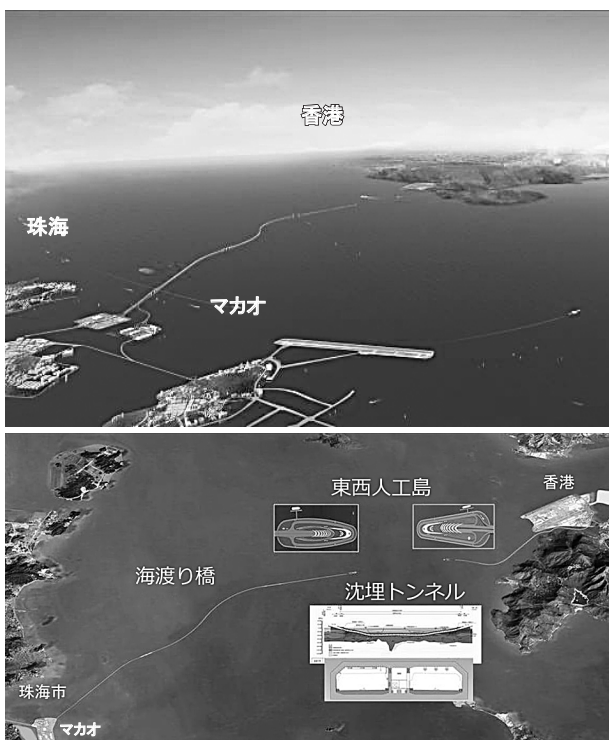


図-3 港澳珠大橋

香港・マカオ・珠海を結ぶ世界最長の海上橋「港澳珠大橋」が2018年10月に開通した。2009年12月着工。全長55kmの道路で、うち35.6kmが海上区間（人工島、橋梁、海底トンネルで構成）。海底トンネルは180mのボックスを33個連結した沈埋トンネル。

### 4) 競争相手か、それともパートナーか

第三国におけるインフラ受注競争において、特に橋梁を含む道路セクターにおいては、中国の建設会社は日本にとって最大の競争相手となっている。日本による円借款プロジェクトでさえ、中国の建設会社を抑えて、全区間を日本の建設会社が受注することは困難である。それゆえに、日本の建設会社の方が優れている部分、例えば、施工管理（品質管理、工程管理、安全管理等）、維持管理、鋼橋等に関する技術やノウハウを守ろうという意識を強く持っている業界関係者は非常に多いように感じる。

しかし、世界中の市場で中国の建設会社の存在感と競争力が増すにつれ、当然のことながら、多くの国々が関係を深めようとアプローチをしてきている。中国の建設会社は、日本以外からも必要な技術やノウハウを得るルートを持っており、現時点で日本の建設会社の方が優れている部分は、おそらく10年も経たないうちに概ね追いつかれる事になるのではないか。近い将来、日本国内の建設市場が再び縮小し、海外事業に活路を見出す必要が出てくるのが分かっている中、中国の建設会社を競争相手としてだけでなく、中長期的にはパートナーとなることも念頭に置き、提供できる技術やノウハウがある今のうちに、Win-Winの関係構築に向けた行動を取ることも必要なのではないかと感じている。

## 2. おわりに

3年間の北京生活で感じた圧倒的なスケールメリット、スピード感、活力など、中国が持つポテンシャルの高さを分かりやすく伝えたいと思ったが、やはり実際に行って、見て、感じてもらわないと、中国のリアルな現状を理解するのは難しいと思う。

例えば北京、上海であれば日本から4時間程度で行ける距離であり、航空券も時期を選べば5万円程度とお手頃である。北京であれば故宫と万里の長城、上海であれば外灘と上海ディズニーランドなど、2泊3日で行ける良い観光地でもあるので、週末+1日で遊びに行ってみては如何だろうか。きっと多くの驚きとともに、今の中国のすごさを肌で感じる事ができると思う。

※本稿は筆者の見解に基づいたものであり、所属する組織の統一見解を示すものではない。